

「かしら」「かな」における性差の史的変遷

任 利

キーワード：かしら、かな、性差、度合い、通時的

要 旨

従来の性差研究では、終助詞「かしら」はいわゆる「女性語」、終助詞「かな」はいわゆる「男性語」とされてきた。本稿では、明治以降現在までに発表された小説などの資料を調査し、終助詞「かしら」と「かな」における性差が通時的にどのように変化してきたかを検証する。

調査の結果から以下のことが明らかになった。

- ①「かしら」は、明治期には男女ともに使用した。明治後期から昭和前期にかけてその女性性が強くなりつつある動きが見られる。昭和期以降は女性のみ使用となった。
- ②「かな」は、明治から大正までは男性のみの使用であり、男性性の強い言語表現であった。昭和前期からは女性の使用例も見られ、その男性性が弱くなり、現在では男女ともに使用する中立的な言語表現である。
- ③「かしら」は確かに現在でも女性性の強い言語表現として使われていることが確認されたが、その役割語的な機能が見られる。

史的変遷の視点から見てみると、「かしら」と「かな」の《女性性・男性性》は常に固定的なものではなく、時代の流れに伴った変化が見られる。言語における性差表現を捉えるために導入した《女性性・男性性》という度合いの概念が、通時的にも通用する概念であることが改めて検証できた。

1. はじめに

現代日本語においては、男性と女性の間で使用することばに相違が見られる。会話における日本語は文字にした場合でも、話し手が男性であるのか女性であるのかが分かるのが普通であるとされる。

例えば、会話文(1)を読むと、aの発話者が女性であり、bの発話者が男性であると判断できる。

- (1) a 「ハイヤーが来たわよ。」
b 「行くぞ。」

文末に使用される「わよ」が女性らしい言い方であり、「ぞ」が男性らしい言い方であるという認識によって、その決定がなされていると思われる。このように、日本語母語話者は文末表現の違いによって、その文を女らしく感じたり、男らしく感じたりする。日本語の文末表現の使い方には、はっきりと性差が見られるのである。従来の研究ではこのような現象をいわゆる「女性語」「男性語」というカテゴリーに分けて記述と分析が行われてきた。

しかし、(2)を見ると、cの発話者は女性であると判断できるが、dの発話者は必ずしも男性であるとは言えない。

- (2) c 「ねえ、入っていいかしら？」
d 「ねえ、入っていいかな？」

つまり、「かしら」の使用者は普通ならば女性であるというイメージを喚起させるが、「かな」は必ずしも特定の性別を連想させない。

ただし、明治期の文献資料を見てみると、「かしら」を使うのは女性だけではなく、(3)のように男性の「かしら」の使用例も多数見られる(詳しくは任(2003)を参照されたい)。一方、当時「かな」は男性の使用例しか見られない(詳しくは3節の調査結果を参照されたい)。

- (3) ・「然し是は猶且俺が悪いのかしら……」 (錦木・桐谷保則の独言)
・「は、、、余り僕が怖いと見えるね、是で、僕は其様な強敵か知ら？」
(初すがた・瀧山→女中)
・「ハ、、、。時に御叔父さんの遺物はもう着いたかしら」
(虞美人草・宗近→甲野)

明治から現在まで、およそ百年の歴史の中でも「かしら」「かな」のように、男女の言葉遣いに微妙な変化が見られる。また、実際の言語使用実態を観察してみると、男性が女らしい言葉遣いを使い、女性が男らしい言葉遣いを使うという言語運用のあり方が見られる。そこで、言語における性差表現を、従来の上二項対立的な「女性語・男性語」というカテゴリーで取り扱っていると、その使用実態を十分に捉えられな

くなるおそれがある。本稿では、《女性性・男性性》という度合いの差の概念でかかる使用実態を捉えてみたいと考える。

本稿は、明治以降現在までに発表された小説などの資料を用い、終助詞「かしら」「かな」の使用実態における男女の使用差を記述し、《女性性・男性性》という度合いの差の概念でその性差の史的変遷を観察する。

2. 先行研究の概観

具体的な調査に入る前に、まず終助詞「かしら」と「かな」に関する先行研究を概観しておく。

2.1. 「かしら」と「かな」の意味・機能

終助詞「かしら」と「かな」の意味・機能に関する記述では、国立国語研究所(1960)、仁田(1987)、森山(1989)、カノックワン(1996)、三宅(2000)などが挙げられる。諸先行研究はそれぞれ異なる立場からの分析であるため、使用された用語も様々である。しかし、ほとんどの研究は終助詞「かしら」と「かな」の意味・機能に関して区別をせず同じく扱っている*1。

諸研究をまとめてみると、以下ようになる。

(4)終助詞「かしら」と「かな」は、語源や語形が異なるが、基本的な意味・機

*1 例えば、国立国語研究所(1960)は、「かしら」と「かな」を同じく「判断への疑念の表現」としている。両者の表現形式の特徴としては、「他に対する質問に一転しうる形式を持ちつつ、なお意味上、話し手みずからの内部での疑念にとどまると認められるものである」(p.106)としている。仁田(1987)は、疑問表現においては、「かしら」と「かな」を同じく「疑いの述べ立て」の形式として位置づけ、「疑いといった文法的な意味を含むものの、問いかけ性がなく(或いは極めて希薄で)、単に疑いを表出・述べ立てているものである。」(p.186)としている。森山(1989)は、「かしら」と「かな」は同じく「聞き手情報非配慮」の表現として、「聞き手に対する応答要求の意味が希薄になる疑問形式である。」(p.104)「語用論的に、結果として聞き手の応答を誘発することが考えられる。」(p.105)としている。カノックワン(1996)は、「かしら」と「かな」の基本的意味を「不定自問」としている。三宅(2000)は、「かしら」と「かな」を同じく「疑念表明の表現」としている。

能は同じく、即ち「自問」である。語用論的には、相手に問いかける場合にも使用されているが、応答の要求性は強くない。

2.2. 「かしら」と「かな」の使用に見られる性差の記述

意味・機能に関しては、同じく扱われている終助詞「かしら」と「かな」であるが、実際の使用実態においては、男女の使用差が見られる。この二つの形式の使用に見られる性差については、カノックワン(1996)、任(1999)の記述がある。

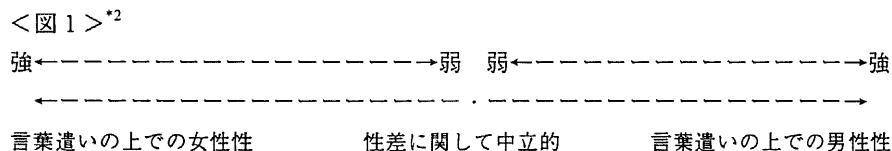
カノックワン(1996)は、実際の会話データと小説、シナリオ、対談集を資料として、「かしら」と「かな」の男女による使用量を比較した結果、実際の会話とシナリオ・小説などの会話において差が見られたものの、必ずしも「かな」は男性の、「かしら」は女性の言い方ではないという結論が出ている。(p.10)

任(1999)は、終助詞「かしら」について「かしらぬ→かしらん→かしら」という歴史の変遷の過程における男女差の形成を考察したものである。昭和前期ごろ、形態上「かしら」という形に固定し、いわゆる女性語として確立したことを明らかにした。同時に、昭和前期以降、男性が「かな」を多用する傾向が見られると報告し、現在に至るまで、終助詞「かしら」は女性らしさを、終助詞「かな」は男性らしさを感じさせるようになったという結論を得た。

しかし、両研究は共時的或いは通時的に「かしら」と「かな」の使用には男女の使用差があるという言語事実の記述にとどまっており、詳しい考察を行っていない。

2.3. ≪女性性・男性性≫の観点からみる「かしら」と「かな」

言語に見られる性差表現について、任(2005e)では、≪女性性・男性性≫という概念を導入した。この概念は従来「女性語・男性語」という二項対立的概念と異なり、≪度合い≫の差で性差表現を捉える考え方である。(定義の詳細は任(2005e)を参照されたい。)この概念を図で簡略に示すと、以下のようになる。



*2<図1>は任(2005e)に基づいて修正したものである。

任(2005e)では、「かしら」と「かな」を事例として、従来の「かしら」は「女性語」、「かな」は「男性語」とする分け方と異なり、≪女性性・男性性≫の概念に従い、「かしら」は女性性の強い言語表現形式、「かな」は男性性の強い言語表現形式という見方を示した。

本来同じく「自問」を表す「かしら」と「かな」であるが、性差に関しては、なぜそれぞれ伴うイメージに違いが現れるのだろうか。任(2003,2005c)では、終助詞「かしら」の女性性の強さの形成に関しては、「かしらぬ>かしらん>かしら」という語形変遷から導かれた本来の意味「自問」と深く関る一方、近代以降に形成されてきた対話ストラテジーにおける性差の反映であると指摘した。しかし、「かな」を視野に入れる場合、「かしら」の女性性の形成と「かな」の男性性の形成には、何か関連があるのではないかと考えられる。

そこで、本稿では、「かしら」と「かな」は基本的に同じ意味・機能を示すものであると認めた上で、明治初期から現在までの歴史の流れの中でその使用実態を調査し、終助詞「かしら」と「かな」における性差の史的変遷をたどってみることにする。

3. 資料調査概要

調査は、明治初年から昭和末期までを通して史的流れをみる部分（調査1と2）と、現状を捉える部分（調査3と4）とに大きく分けて考察することにした。

調査1と2の資料は、明治初年より昭和末期までに発表された小説である。調査3と4は近年刊行されたシナリオと職場で録音された自然談話である。（資料の詳細は論文末に掲げる。）調査1と2の資料は書かれたもので、いわゆる文字資料であるため、当時実際に話した言葉との間にずれがあると予測されるが、史的变化の軌跡を見るという目的の範囲で使う資料としては有効であると考えられる。

用例の採集にあたり、「かな」と「かなあ」の表記の違いを問題とせず、同じく「かな」の用例とした。明治期の資料では、「か知ら」のような漢字まじりの表記も「かしら」とした。また、今回「かしら」「かな」のイントネーションの違いによる意味の異なりについては考察外とした。

3.1. 調査1とその結果——任(1999)に基づく再調査

調査1は明治初年から昭和末期までに発表された小説を任(1999)の結果に基づい

て、再調査したものである。表1*³はその結果である。

表1	かしらぬ		かしらん		かしら		かな	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
明治前期	0	0	27	3	0	3	27	0
明治後期	1	0	41	6	47	58	81	0
大正期	0	0	11	5	43	48	27	0
昭和前期	0	0	3	1	19	123	35	7
昭和後期	0	0	1	4	15	123	97	3

* 表内の数字は使用例数である。以下の表 2.3.4.5 も同様。

3.2. 調査2とその結果——明治期・大正期の追加調査

調査2は明治期及び大正期における男女の「かな」の使用実態を確認するために追加調査したものである。資料には「CD-明治の文豪」(作品数35本)と「CD-大正の文豪*⁴」(作品数34本)を用いた。表2はその結果である。

表2	かな	
	男性	女性
明治の文豪	388	0
大正の文豪	250	6

3.3. 調査3とその結果——現代シナリオの調査

調査3は近年刊行されたシナリオ(作品11本)の使用を調査したものである。

*3 表1の時期区分は任(1999・2003)と同様である。詳しくは以下の通りである。

明治前期 明治初年から明治十年代の終わりまで；

明治後期 明治二十年代の初めから明治の末年まで；

大正期 大正の初年から大正十二年九月の大震災まで；

昭和前期 大正十二年の関東大震災から昭和二十年八月の終戦まで；

昭和後期 終戦後から昭和50年まで

*4 「CD-大正の文豪」に含まれる作品に任(1999・2003)の時期区分に従うと、昭和前期に属するものがある。例えば、『縮図』(昭和16年)など。

表3はその結果である。

表3	かしら		かな	
	男性	女性	男性	女性
シナリオ	0	64	78	132

3.4. 調査4とその結果——自然談話の調査

調査4は現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』の自然談話データを調査したものである（発話者男性62人、女性74人、不明18人、総154人）。表4はその結果である。

表4	かしら		かな	
	男性	女性	男性	女性
自然談話	0	53	33	192

上記の調査結果から分かることは以下の3点である。

- (Ⅰ) 明治後期・大正期には、男性も「かしら」を使っていた。「かしら」は最初から女性性の強い表現であったとは言えない。昭和前期に入り、語形が「かしら」に固定するとともに、女性性の強い表現になった。
- (Ⅱ) 明治初年から大正期にかけて、「かな」の使用者は男性のみであった。昭和前期に入り、女性の「かな」の使用例が見えるが、用例数自体は少ない。全体的に「かな」の男性性が強く見られる。
- (Ⅲ) 調査3、4から分かるように、現在では、「かな」については、男女ともに使用している。「かな」の男性性が薄れて中立的な表現になりつつあると言える。「かしら」については、男性の使用例は皆無である。使用者は女性のみである。「かしら」は依然として女性性の強い言語表現であることが確認された。

上記の(Ⅰ)については、任(2003)で既に指摘した。次節では、(Ⅱ)(Ⅲ)の使用様相を記述していく。

4. 終助詞「かしら」と「かな」における性差の史的変遷

4.1. 男女の「かな」の使用様相の史的変化

前節の調査結果から分かるように、明治初期から大正期にかけて、「かな」の使用者は男性のみである。終助詞「かな」は、最初、どういう人物像の男性が使用しはじめたのか、近世江戸語資料を含めて再確認・検討する必要があると思われる*5。別稿に委ねたい。

まず、今回の調査資料のうち、より早い時期の使用例としては(5)がある。(5)は妓院の主人が遊女喜遊に話した例である。

- (5)主「今時おぬしのやうな野暮固い事を言ふものがあるものかな」喜遊「そりやア旦那さんのお言なはる事でもありますけれども」

(春雨文庫・妓院の主人→喜遊)

明治18年の『当世書生気質』、明治19年の『雪中梅』には書生同士の会話に「かな」の使用例が多く見られる。

- (6) (須)守山君の代言人は、少々適當しないでハないかなア。(宮)ナゼ。
(須)何故でも。守山君はあんまり謹慎すぎるからなア

(当世書生気質・須河→宮賀)

- (7)國「ハ、ア、此の壮士は田村さんの御同郷ですかかな。田「イーエ〇〇縣の島田という御方で、先年自由黨の盛んな時分に東京で交際をしましたが、」

(雪中梅・國野→田村)

明治後期・大正期の資料には、男性「かな」の使用例が多く見られる。

- (8)「もう湯は抜けるのかな。」「へい、松の内は早仕舞でございます。」

*5 例えば、近世江戸語資料には、以下のような「かな」の用例が見られる。

・作「(略)やつぱり貴殿ス、能いかなア」甘「能いとも。」

(滑稽本・浮世風呂 1809～13) 四・上、有朋堂

・びん「どうだ飛公。」とび「どうは此通り益御機嫌よく、銭右衛門方に御遊ばされ、相変らず居候なりけり山桜かなッ」(滑稽本・浮世床 1813～1823) 初・下、友朋堂

（金色夜叉・富山→車夫）

- (9) 「然う云ふ事が有りますかな。」「だつて、私の耳へさへ入る位なのに、お前さんが萬更知らない事は無からうと思ひますかね。」

（金色夜叉・間貫一→お峯）

- (10) 「睡て居りますですかかな。」「はい、如何でございますか。」

（金色夜叉・鳴澤→満枝）

- (11) 「それでは失礼ながら貴嬢の御姓名は何と仰しやりますかな」「ハイ母の姓を名乗りまして眞野君江と申します。」

（乳姉妹・侯爵家顧問高林老人→君江）

- (12) 「小川君、君は明治何年生れかな」と聞いた。三四郎は単簡に、「僕は二十三だ」と答えた。

（三四郎・興次郎→三四郎）

- (13) 「ハ、、、夫で君は幾歳だつたかな」「おれの幾歳より、君は幾歳だ」

（虞美人草・甲野→宗近）

中には、(7)(9)(10)(11)のように、丁寧語「です」「ます」に「かな」を接続している例も見られる。現代語ではあまり見られない稀な現象である。(7)は政治家の國野が田村の同伴の事を尋ねる場面の用例である。(9)は高利貸に転身した元書生である貫一が鰐淵の奥様に尋ねた時の用例である。(10)は旧官僚鳴澤が金持ちの奥様満枝に対して使用する例である。(11)は侯爵家顧問高林老人が若い娘君江に問いかける場面の用例である。いずれも明治期に教養のある男性いわゆるインテリが丁寧な言葉遣いを必要とする改まった場面での使用である。「です・ます」などの丁寧語は相手に対して敬意を示す表現であり、聞き手に対して直接に発話されるといふ面が強い。このような「丁寧語+かな」の使用現象については別稿で観察する必要がある。

昭和期の資料では、「かな」はほとんどが以下のような男性の用例である。

- (14) 「臆病だなあ……。開けて退治しようかな」(若い人・間崎先生→橋本先生)

- (15) 「帰ってよく見なければ分らんが、まず十時間内外かな」

（点と線・医者→捜査係）

- (16) 「ま、俺がつくったものじゃ、最高じゃないかな。」（忍ぶ川・要→多美）

- (17) 「借金の申し込みかな」

（太郎物語・太郎→黒谷）

以上で観察されたように、明治・大正にかけて「かな」はほとんどが男性の使用

である。しかも、本来の「自問」の用法というより、ほとんどが対人的な関係を重視する対話における使用である。特に「です・ます」などの丁寧語との共存使用は、聞き手に対して発話するという対人的な機能が一層はっきり見える。昭和期の使用例を見ても同じような傾向が見受けられ、「かな」の男性性の強さは対話的な環境に用いられるものであるといえる。

一方、明治・大正期の文献における女性「かな」の使用例は、「CD-大正の文豪」を対象とした追加調査の結果を含め、わずかに計 16 例である*6。以下は女性の「かな」の使用例である。

- (18) 「今夜はまた聲が高いわね。水で冷やしてゐる病人があるのに、もつと低く
しないかな。」 (縮図・加世子の独り言)
- (19) 「してみると矢張眞實なかな」 (縮図・銀子の内心語)
- (20) しばらく黙って揉んでいたが、遠い座敷の三味線の音に首を傾げた。
「誰かな」 (雪国・女性按摩さんの独り言)

上記の女性の使用例を見てみると、ほとんどが内心語の引用及び独り言といった「かな」の本来の意味である「自問」の用法の例である。女性「かな」のわずかな用例が「自問」に限られているという点から見ると、上記において観察された男性の使用例とはかなりの相違が見られる。

本節では、明治から昭和末期までの男女の「かな」の使用状況について通時的に概観した。明治初期から大正期まで、「かな」の使用者は男性のみである。「かな」は男性専用の形式であり、≪女性性・男性性≫の概念で解釈すると、その極端に位置づけられる非常に男性性の強い言語表現形式であったといえる。昭和期に入ると、女性の「かな」の使用例は少ないものの、実際の使用例が見られ、「かな」は男性専用形式ではなくなる。しかし、女性の使用率はかなり低く、「かな」は全体とし

*6 この 16 例のうち、以下のような方言的な要素が入った例がある。方言的な要素については本稿では考察の対象外とした。

・「油汁なら出来やすが、それじゃいけやせんか。河で捕れた鯪もごわす。鯪でも上げやしようかなあ」(破戒・主婦→答)

・巫女 何時からこんな御病気で御座んしたかな。義助 もう生れついでので御座んしてな。(父帰る・巫女→義助)

で女性の間でまだ普通には使われていない。また、男性と女性の「かな」の具体的な用例を観察してみると、女性のわずかな「かな」の使用はいわゆる本来の「自問」の用法にとどまっている。一方、明治から昭和末期までの男性「かな」の使用例はほとんど対人的な機能が重視される対話における使用である。「かな」の男性性の強さは本来の「自問」の用法から派生した対話の用法で用いられるものであるとも言える。

4.2. 現代の使用様相——シナリオと自然談話

本節では、現代において男女の「かしら」「かな」の使用がどのような状況であるのかをシナリオの調査結果と自然談話の調査結果から見ていく。

シナリオから採集された64例の「かしら」の用例は以下のように女性のみを使用である。

(21) 澄子「永尾さん。どうかしたのかしら」

金沢「うん。ちょっと遅すぎるようだが」(シナリオ・あした・澄子→金沢)

(22) たま子「豊子、ラテンは青木さんと組んで踊ってもらえないかしら」

豊子「ええー！なんであたしがこんなのと。杉山さんの方が、まだマシよ」

(シナリオ・Shall we ダンス？・たまこ→豊子)

(23) 豊子「お干物、お好きかしら」

綱子「あー、大、好物…」

(シナリオ・阿修羅のごとく・豊子→綱子)

自然談話から採取された53例の「かしら」の用例はすべて女性の使用例である。

(24) 3428, 台風がほんとうに来るのかしら。

3429, いや、来ないって。

(自然談話・大学助手[43才, 女性]→大学助手[39才, 女性])

(25) 7158, きょう誰かかしら。

7159, きょう、[名字] 次長。

(自然談話・会社員[22才, 女性]→会社員[24才, 女性])

(26) 7846, できたかしら。

7847, はーい、どうぞ。

(自然談話・経理事務[22才, 女性]→不明[女性])

しかし、表3と表4の結果から分かるように、シナリオ、自然談話のどちらにお

いても女性は「かしら」より「かな」を多く使う傾向が見られる。

(27) 蓉子「なぜ、わたしに会いたくなったのかな」

(シナリオ・午後の遺言状・蓉子の独り言)

(28) 咲子「食べもののせいかな？」

綱子「昔こんなに、バターやチーズ食べなかったもの」

(シナリオ・阿修羅のごとく・咲子→綱子)

(29) 徳子「この家賃も、もしかしてたまってるんじゃないかな」

隆人「ああ…」

(シナリオ・カナカナ)

特に若い女性あまり「かしら」を使わなくなり、「かな」の方を多用している。若い男女を主人公とするシナリオ『東京ラブストーリー』『最後の恋』では、20代の若い女性の「かしら」の使用例が一例もなく、全員「かな」を使っている。シナリオではおとなしく女性らしい人物として描かれている者（例えば(30)のさとみや(31)の小百合）も文末に「かしら」ではなく、「かな」を使っている。つまり、「かしら」を使いうる状況でも、「かな」が使われたのである。

(30) さとみ「永尾くんとは安心して逢えるかな」

(シナリオ・東京ラブストーリー)

(31) 小百合「純一と一緒に私も行こうかな」(シナリオ・あした・小百合→純一)

また、同一女性の発話の中には、「かしら」と「かな」が並行して使用されている用例が見られる。例えば、『阿修羅のごとく』では卷子が一つの発話に「かしら」と「かな」を併用している。ここでの「かしら」と「かな」は文法的にも置き換えられるものである。

(32) 卷子「どうして、あんなに踵、ひび割れてたのかしら。荒れ性だったのかな」

滝子「苦労したからよ。お母さん、食べるもの、食べない時期あったもの」

(シナリオ・阿修羅のごとく・卷子→滝子)

(33) 鷹男「沢山か」

卷子「四枚かな、五枚だったかしら」

(シナリオ・阿修羅のごとく・卷子→鷹男)

また、上記の用例から観察した通り、女性の「かな」の使用は独り言のような「自問」の用法だけではなく、対話において問いかける時にも使用されるのである。

一方、男性の場合、シナリオでも自然談話でも以下のように「かな」の使用例しか見られず、男性「かしら」の使用は皆無である。

(34)金沢「バスを待っているのかな。あんた方も」

(シナリオ・あした・金沢→ルミと法子)

(35)秋葉「やっぱアレかな？」

博子「？」

(シナリオ・Love Letter・秋葉→博子)

(36)服部「どうしてこうみんな遠くの教室に行くのかな」

(シナリオ・Shall we ダンス?・服部→杉山達)

(37)2891,→おれと同じぐらい←じゃないかな。

(自然談話・大学教員[65才,男性]→会社員[43才,女性])

(38)2984,そうさいちょう、もし、やってくれるんなら、ほくの一、あれでもやっ
てもらおうかな。

(自然談話・大学教員[65才,男性]→会社員[43才,女性])

(39)3679,こうゆうふうにできないかな。

(自然談話・小学校教員[37才,男性]→小学校教員[52才,女性])

以上の現状観察をまとめると、次のようになる。

終助詞「かしら」の使用については、男性による使用は皆無であり、使用者は女性に限られるという点で、現在でも女性専用形式となっている。即ち、非常に女性性の強い言語表現であるといえる。しかし、女性専用とはいうものの、「かしら」を使いうる状況において、常に、あるいは皆が使っているというわけではない。

終助詞「かな」の使用については、女性が実際に使っているという点から、男性専用形式ではなく傾向的な性差表現であると言える。注目されたいのは、女性「かな」の使用が本来の「自問」だけではなく、対話において聞き手に対して問いかける時にも使用されるという点である。つまり、「かな」の男性性の度合いが強い方からだんだん弱くなって、性差に関して中立的になりつつあると考えられる。

一方、歴史的な流れにおける「かしら」の男女の使用差を記述した任(2003)において指摘したように、明治後期・大正期には男性「かしら」の使用例が多数見られる。「かしら」は最初から女性性の強い言語表現ではなかった。しかし、昭和に入ると、「かしら」の使用はほとんど女性に限られ、非常に女性性の強い言語表現と

なった。

史の変遷の観点から見ると、「かしら」と「かな」は≪女性性・男性性≫というスケールの上で変動していく様子が見られる。性差表現は一方の性の使用に固定的ではなく動的な特徴が見られる。言語における性差表現を捉えるにあたって導入した≪女性性・男性性≫という度合いの概念が、通時的にも通用する概念であることがあらためて検証できた。

4.3. 役割語としての「かしら」

前節で観察したように、シナリオと自然談話では、「かしら」を使用するのは女性のみである。ここから、「かしら」は確かに現在でも女性性を積極的にマークする表現として使われていることが確認された。しかし、「かしら」を使っている状況では、常に、あるいは皆が使っているというわけではない。実際に「かな」に比べると、「かしら」の使用率はむしろ低い方である。

場面的にも文法的にも「かしら」を使っている環境があるにもかかわらず実際の使用が少ないということは非常に興味深いことである。「かしら」は女性性の強い表現形式とされるが、日常の生活では、「かしら」を使っている状況であっても、多くの場合、対立する形式である「かな」を使用するのである。データの観察結果はその反映と見ることが出来る。

「かしら」には、日常の言語生活から離れて、その使用者の役割を端的に浮き彫りにするために使用される、いわゆる役割語^{*7}的な機能が見られる。特にコミックなどキャラクター作りのために、主人公の言葉遣いとして使用されることがある。

例えば、顔はそっくりだけど、性格は正反対である高校生の双子の姉妹を描いた小林深雪のコミック『ふたりのプリンセス』では、姉の奈々は内気でおとなしい、家で本を読むことが趣味の本当に女らしい女性として、妹の未々はおてんばで勝ち気でスポーツ好きな元気な女性として描かれている。同じ年齢の女の子で、また、同じ家庭の中で育ったにもかかわらず、(40)(41)のように、彼女たちの言葉遣いは

*7 金水(2003)では、「役割語」について、以下のように定義している。(p.205)

ある特定の言葉づかい(語彙・語法・言い回し・イントネーション等)を聞くと特定の人物(年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等)を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ。

ずいぶん異なる。

- (40) あたし、星野未々。おてんばで勝ち気な高校1年生。お勉強は、ダメだけど、スポーツだったらなんでもこい!の元気少女なのッ。奈々は、あたしの双子のお姉さん、なんだ。(未々のことば)
- (41) わたし星野奈々。すっごく内気で、人見知りが激しいの。趣味は、おうちで本を読むこと。お友だちは、双子の妹、未々ちゃんだけ。(奈々のことば)

コミック全三冊中、奈々と未々の文末の「かしら」と「かな」の使用状況を調査した結果は表5のようになる。

表5	かしら	かな
奈々	21	5
未々	2	28

- (42) 「未々ちゃん、今頃、どうしているかしら? あいかわらず、のーてんきに、立ちまわってるのかしら?」 (奈々のことば)
- (43) 「奈々のヤツ、大丈夫かなあ? (略) あたしってば、奈々が言うように、のーてんきすぎるのかなあ?」 (未々のことば)

表5から、奈々と未々による「かしら」と「かな」の使用量に違いが観察される。奈々の言葉遣いには「かしら」を多用させ、反対に妹の未々には「かな」を多用させている。「かしら」は女性性の強い言い方と意識される。そこで、作家は「かしら」を奈々に、「かな」を未々に使用させることにより、おてんばでボーイッシュな未々と比較し、奈々の言葉遣いに女の子らしい女性性の強さを表したと考えられる。性差表現としての「かしら」「かな」の対比使用から、登場人物のキャラクターを表すための役割語的な特徴が見られる。

もちろん、コミックなどに現われる女性像がある種の虚構であって、現実の女性と一致しないことは言うまでもない。しかし、現実には言語表現には「性差」があるからこそ、読者に「性差」に関する役割語の知識があるからこそ、作家は主人公の台詞にそのような言語表現を使用する。そうすることにより、作家が受け手である読者に特定のメッセージを伝えているのである。その根底には文化的背景として男性・女性がどの様な話し方をすべきかという共通する規範が存在しているからで

ある。そこで、コミックなどでは実際の使用実態以上に「性差」が意識されるのであろう。

「かしら」「かな」などの性差表現は日常語から離れ、役割語化されたと言える。それは言語使用のあり方におけるジェンダー意識の反映であろうと考えられる。

5. おわりに

本稿では、明治以降現在までに発表された小説などの資料を調査し、終助詞「かしら」と「かな」における性差が通時的にどのように変化してきたのかを検証した。調査の結果から、「かしら」と「かな」の≪女性性・男性性≫は固定的なものではなく、時代の移り変わりとともに変動していくことが分かった。即ち、史の変遷の観点から性差表現に動的面があるということが明らかになった。また、共通認識に基づく性差表現が現実にはほとんど使用されず、役割語的な面があるということも明らかになった。

言語は時代とともに変わっていくものである。通時的に、性差表現は昔どうなっていたのか、どのようにして現代のように現れたのかという史の変遷の観点を持つと、日本語における性差の有するさまざまな可能性というのが見えてくる。本稿のような視点は、日本語性差表現の形成の歴史をどう捉えるべきかという問題を考える上で有益であると考ええる。

また、日本語の性差表現を見る場合、しばしば注目されるのは女性側の変化であるが、同時に男性の側にも変化がありそうである。例えば、「かしら」と「かな」における性差の形成はその例である。男女両方の形式に注目しつつ、使用者については男女両方を観察し、より総合的に見ていくことが現代日本語における性差の全体像を見る上で必要であると思われる。

参考文献

- 遠藤織枝・尾崎喜光(1998)「女性のことばの変遷—文末・コト・テヨ・ダワを中心に—」『日本語学』17巻6号 明治書院
- カノックワン・ラオハブラナキット(1996)「[カナ][カシラ]に関する考察」『日本語と日本文学』23号 筑波大学国語国文学会
- 金水 敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 国立国語研究所報告3(1951)『現代語の助詞・助動詞：用法と実例』秀英出版
- 国立国語研究所報告18(1960)『話しことばの文型(1)—対話資料による研究—』秀英

出版

- 鈴木英夫(1998)「現代日本語における女性の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究』（佐々木峻、藤原与一編）三弥井書店
- 坪井美樹(2003)「男手・女手ー「性差」による表記様式の分類ー」『筑波日本語研究』8号 筑波大学日本語学研究室
- 仁田義雄(1987)「現代日本語疑問表現の諸相」『言語学の視界』大学書林
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』くろしお出版
- 仁田義雄(1994)「〈疑い〉を表す形式の問いかけの使用ー「カナ」を中心とした覚書ー」『現代日本語研究』1 大阪大学文学部現代日本語学講座
- 任利(1999)「「～かしら」についての歴史的変遷の研究」北京日本学研究中心修士学位論文（未公刊）
- 任利(2003)「終助詞「かしら」における男女差の形成ー近代小説における用例調査を中心にー」『筑波日本語研究』8号 筑波大学日本語学研究室
- 任利(2005a)「明治30年代の小説における性差と文末表現」『日本語と日本文学』40号 筑波大学国語国文学会
- 任利(2005b)「言語研究における≪女性性・男性性≫の概念規定」現代日本語研究会第14回ワークショップ研究発表資料 2005年8月3日於ヌエック国立女性教育会館
- 任利(2005c)「文末の「かしら」と非文末の「かしら」ー性差表示の出現位置をめぐるー考察ー」『筑波日本語研究』10号 筑波大学日本語学研究室
- 任利(2005d)「女性性・男性性の表出と言語形式の選択ー『社会百面相』を資料としてー」筑波大学国語国文学会第29回大会 2005年10月1日於筑波大学
- 任利(2005e)「言語研究における≪女性性・男性性≫という概念についてー現代日本語の言語使用実態に基づく概念規定の試みー」『ことば』26号 現代日本語研究会
- McGloin, N. (1991) "Sex Difference and Sentence-Final Particles" In S. Ide and N. McGloin (eds) *Aspects of Japanese Women's Language*. Kuroshio Publishers
- マグローイン・花岡直美(1993)「終助詞」『日本語学』12巻6号 明治書院
- 三宅知宏(2000)「疑問表明の表現についてーカナ・カシラを中心にー」『鶴見大学紀要』37号第I部国語・国文学編 鶴見大学
- 森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 森山卓郎(1989)「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版

山口堯二(1990)『日本語疑問表現通史』明治書院

【調査資料】

本稿で調査した資料は以下のようである。括弧の中はそれぞれ成立年代・作家・使用テキストである。

<小説資料>

明治前期：

西洋道中膝栗毛(明治3・仮名垣魯文・明治文学全集1 筑摩書房) 菊模様皿山奇談(明治4年・三遊亭円朝・円朝全集巻ノ九 世界文庫) 安愚楽鍋(明治5・仮名垣魯文・明治文学全集1 筑摩書房) 春雨文庫(明治9年・松村春輔・明治文学全集1 筑摩書房) 青楼半化通(明治11・万亭応賀・明治文学全集1 筑摩書房) 鹽原多助一代記(明治17・三遊亭円朝・円朝全集巻ノ十二 世界文庫) 當世書生氣質(明治18・坪内逍遙・明治文学全集16 筑摩書房) 妹と背かゞみ(明治19・坪内逍遙・明治文学全集16 筑摩書房) 雪中梅(明治19・末広鉄腸・明治文学全集6 筑摩書房)

明治後期：

浮雲(明治20・二葉亭四迷・明治文学全集17 筑摩書房) 藪の鷲(明治21・三宅花圃・明治文学全集 筑摩書房) 露子姫(明治22・石橋忍月・明治文学全集23 筑摩書房) たけくらべ・この子(明治28・樋口一葉・樋口一葉全集 和泉書院) 金色夜叉(明治30・尾崎紅葉・明治文学全集18 筑摩書房) 不如帰(明治31・徳富蘆花・筑摩現代文学大系5 筑摩書房) 初すがた(明治33・小杉天外・明治文学全集65 筑摩書房) 錦木(明治34・柳川春葉・明治文学全集22 筑摩書房) 紺暖簾(明治34・山岸荷葉・明治文学全集22 筑摩書房) 乳姉妹(明治36・菊地幽芳・明治文学全集93 筑摩書房) 其面影(明治39・二葉亭四迷・日本近代文学大系4 角川書店) 野菊の墓(明治39・伊藤左千夫・左千夫全集第二巻 岩波書店) 破戒(明治39・島崎藤村・現代日本文学大系8 筑摩書房) 蒲団(明治40・田山花袋・明治文学全集67 筑摩書房) 虞美人草(明治40・夏目漱石・漱石全集第4巻 岩波書店) 三四郎(明治41・夏目漱石・春陽堂) 波瀾(明治42・森しげ・現代日本文学大系5 筑摩書房) 田舎教師(明治42・田山花袋・明治大正文学全集第23巻 春陽堂) あきらめ(明治44・田村俊子・現代日本文学大系7 筑摩書房) 青年(明治44・森鷗外・精選名著復刻全集)

大正期：

心(大正3・夏目漱石・春陽堂) 明暗(大正5・夏目漱石・漱石全集7 岩波書店) 腕くらべ(大正5・永井荷風・日本近代文学大系29 筑摩書房) 父帰る(大正7・菊池寛・新潮文庫) 友情(大正8・武者小路実篤・定本 武者小路実篤選集3 日本書房) あらくれ(大正9・徳田秋声・秋声全集5 雪華社) 千人風呂(大正9・葛西善蔵・葛西善蔵

全集1 文泉堂）伸子（大正12・宮本百合子・宮本百合子全集3 新日本出版社）

昭和前期：

伊豆の踊子（昭和元・川端康成・川端康成全集2 新潮社）真知子（昭和3・野上弥生子・野上弥生子全集3 岩波書店）女の一生（昭和7・山本有三・山本有三全集7 新潮社）若い人（昭和8・石坂洋次郎・新潮文庫）雪国（昭和10・川端康成・川端康成全集10 新潮社）機械・上海（昭和12・横光利一・定本横光利一全集3 河出書房新社）風立ちぬ（昭和11・堀辰雄・風立ちぬ・美しい村・精選名著復刻全集）檸檬（昭和14・梶井基次郎・檸檬・新潮文庫）オリンポスの果実（昭和15・田中英光・田中英光選集第一巻 新潮社）縮図（昭和16・徳田秋声・秋声全集13 雪華社）

昭和後期：

斜陽（昭和22・太宰治・太宰治全集 筑摩書房）青い山脈（昭和22・石坂洋次郎・現代文学大系54 筑摩書房）夏子の冒険（昭和26・三島由紀夫・三島由紀夫全集 新潮社）千羽鶴（昭和27・川端康成・川端康成全集 新潮社）山の音（昭和29・川端康成・川端康成全集 新潮社）おとうと（昭和31-32・幸田文・幸田文全集 岩波書店）点と線（昭和32-33・松本清張・松本清張傑作総集一 新潮社）忍ぶ川（昭和35・三浦哲郎・新潮文庫）榆家の人々（昭和37・北社夫・新潮社）眼の壁（昭和37・松本清張・松本清張傑作総集一 新潮社）花のいのち（立原正秋・昭和42年・新潮文庫）太郎物語（昭和47-48・曾野綾子・曾野綾子選集第七巻・読売新聞社）

<コーパス資料>

【CD-明治の文豪】新潮社 1997年

長塚節【土】／国木田独步【武蔵野】／二葉亭四迷【あいびき】【浮雲】【平凡】【其面影】／尾崎紅葉【金色夜叉】／田山花袋【布団】【生】【田舎教師】／泉鏡花【婦系図】【高野聖】／森鴎外【雁】【青年】【舞姫】【山椒大夫】／夏目漱石【こころ】【それから】【彼岸過迄】【草枕】【道草】【三四郎】【文鳥】【硝子戸の中】【行人】【虞美人草】【二百十日】【坊っちゃん】【坑夫】【倫敦塔】【吾輩は猫である】【門】【明暗】／樋口一葉【にごりえ】／伊藤左千夫【野菊の墓】

【CD-大正の文豪】新潮社 1997年

倉田百三【出家とその弟子】／長与善郎【青銅の基督】／島崎藤村【春】【海へ】【家】【旧主人】【嵐】【破戒】【千曲川のスケッチ】【市井にありて】【新生】【夜明け前】【桜の実の熟する時】／徳田秋声【あらくれ】【縮図】／葛西善藏【葛西善藏集】／芥川龍之介【地獄変】【奉教人の死】【河童】【羅生門】【文芸的なあまりに文芸的な】【戯作三昧】【蜘蛛の糸】【侏儒の言葉】／久米正雄【学生時代】／菊池寛【父帰る】【藤十郎の恋】／里見弴【多情仏心】／梶井基次郎【檸檬】／幸田露伴【太公望】／岩野泡鳴【泡鳴五部作】／有島武郎【或る女】【惜みなく愛は奪う】【小さき者へ】

<シナリオ資料>

阿修羅のごとく (向田邦子作) 向田邦子TV作品集1 大和書房 1982 /東京ラブストーリー (柴門ふみ原作、坂元祐二脚本) 小学館 1990 /天上の青 (曾野綾子原作、井上由美子脚本) テレビドラマ代表作選集 1995年版・日本脚本家連盟 / Love Letter (岩井俊二脚本) 95年鑑代表シナリオ集 映人社 / 午後の遺言状 (新藤兼人脚本) 95年鑑代表シナリオ集 映人社 / 学校の怪談 (奥寺佐渡子脚本) 95年鑑代表シナリオ集 映人社 / あした (桂千穂脚本) 95年鑑代表シナリオ集 映人社 / カナカナ (大嶋拓脚本) 95年鑑代表シナリオ集 映人社 / Shall we ダンス? (周防正行脚本) 96年鑑代表シナリオ集 映人社 / 新居酒屋ゆうれい (田中陽造脚本) 96年鑑代表シナリオ集 映人社 / 最後の恋 (上・下) (北川吏江子) 角川書店 1997

<コミック資料>

ふたりのプリンセス (1991・小林深雪・講談社X文庫) / ふたりのラブレター (1992・小林深雪・講談社X文庫) / ふたりのアイドル (1993・小林深雪・講談社X文庫)

<自然談話資料>

『女性のことは・職場編』現代日本語研究会 ひつじ書房 1997年

ニシノリ / 人文社会科学研究所
(2006年10月12日 受理)